

ふるさと見て歩き 第98回

「大井神社のなぞ」

◇門井に残る神社にまつわる言い伝え

県道烏山一御前山線沿いに鎮座する、御前山地域門井の鎮守「鹿島神社」。境内に杉や銀杏の大木が生い茂る、門井の人々の信仰のより所となってきた古い神社です。ここには、地域の人々の間にこんな言い伝えが残っています。

「この神社は、水戸藩第2代藩主徳川光圀の命によって鹿島神社と改められる以前、おお大井神社と称していた。現在、水戸市飯富にある式内社の大井神社がもとは鹿島神社であり、門井の神社と交換されたのだ。」

◇「式内社」大井神社

式内社とは、今から千年以上昔の平安時代半ばにまとめられた延喜式の神名帳に登録され、官社となっている由緒ある神社のことです。

飯富の大井神社は、式内社「常陸国那賀郡七座」内の小社 大井神社に当たるといわれています。祭神は、延喜式では鹿島明神となっていますが、正しくは、大和朝廷から国家統一のため東国に派遣されたとされる建借間命たけかしまのみことで、名称が似ていることから誤って記載されたようです。

延喜式と同時代に成立したわが国最古の漢和辞典であり百科事典である「和名類聚抄」によると、常陸国那賀郡（那珂郡と表記するのは後のこと）は22の郷から成っていました。そのなかの大井郷については、大井神社の存在から、水戸市飯富付近説が有力です。

しかし千年も前の郷が、現在のどのあたりの地域に当たるのかを突き止めることはたいへん困難で、江戸時代以来多くの学者が頭を悩ませており、いまだ確定はしていません。

官社である式内社は、毎年の祈年祭に朝廷や常陸国府（今でいえば国や県）が直接役人を派遣してお供え物をする、とても重要な神社。ちなみに、常陸国内の式内社は全部で28座、そのうちの7座ずつが当時の那賀郡と久慈郡に鎮座しています。鹿島を含む他の7つの郡には1～3座、河内・行方両郡には式内社がありません。鎮座地は移動しているようですが、市内ではもう一社、上小瀬の立野神社たてのが式内社です。

◇門井にあった大井神社

江戸時代末に編まれた『新編常陸国誌』の「門井」の記述の中に、鎮守鹿島明神についての文章があります。いわく「伝えによれば、この神社はかつて字井戸の上うへにあって大井明神と言ったが、後に現在地に遷し（中略）元禄四年（1691年）に現在名となった」。

また、神社には応永33年（1426年）刻銘のある古い鰐口わにぐち（市指定文化財）が残っていて、『御前山郷土誌』によると「応永三十三歳丙午 十一月十六日大井明神」と刻まれているそうです。現物を確認したところ、「應永三十三年 丙午 十一月十日 七日」[]（※不明瞭な文字は□で囲っています）までは読むことができましたが、肝心の「大井明神」のあたりが磨耗していて読めません。

氏子の一人に案内してもらったもとの社地「井戸の上」には、今でもこんこんと清水が湧いていました。



▲「井戸の上」の湧水



▲鰐口

◇飯富の大井神社についての記述

では、飯富の神社のことは『新編常陸国誌』にどのように書かれているでしょう。飯富の古名「大部」の項にそれはあります。

「村の大井戸みたらいの地に泉がわいている。里人はこれを大井神社の御手洗みたらいと言っている。北に十余町離れたところに鹿島明神の祠ほこらがある。すなわち大井神社である。」

うーむ…。とにかく、双方とも「大井」と呼ばれるにふさわしい湧水があることは共通しています。祭神の建借間と、鹿島明神（神名は武甕槌命たけみかづちのみこと）が似ていることも混乱の要因かもしれません。

◇まだまだ歴史はなぞだらけ

『御前山郷土誌』には、「最近まで存した社誌によれば、元禄年中に棟札33枚が紛失」とも記されています。また、門井に大井神社があったことは口止めされている、との噂も聞きました。

さあ真実はいかに。

身近な歴史は、まだまだ謎だらけ。現在、資料館（大宮館）では、門井地区からお預かりしている問題の鰐口を展示しています。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450